

長期留学（学位取得目的）と 短期留学（単位取得目的等）の 効果・学習成果の比較分析

—海外留学経験者に対する回顧的追跡調査の結果から—

異文化間教育学会第39回大会@新潟大学

2018年6月10日（日）

新見有紀子（一橋大学）・秋庭裕子（一橋大学）

太田浩（一橋大学）・横田雅弘（明治大学）

本日の報告について

- 新見有紀子・秋庭裕子（2016）「学部レベルの海外留学経験が能力・意識の自己評価にもたらすインパクト」『留学生教育』
 - 新見有紀子・秋庭裕子・太田浩・横田雅弘（2017）「学部レベルの海外留学経験がキャリアにもたらすインパクト」『留学交流』
- に新たな項目を追加し総合的に分析を行ったもの

本日の報告資料は以下のホームページに掲載予定です

<http://recsie.or.jp/project/gj5000/society/>

「GJ5000」で検索

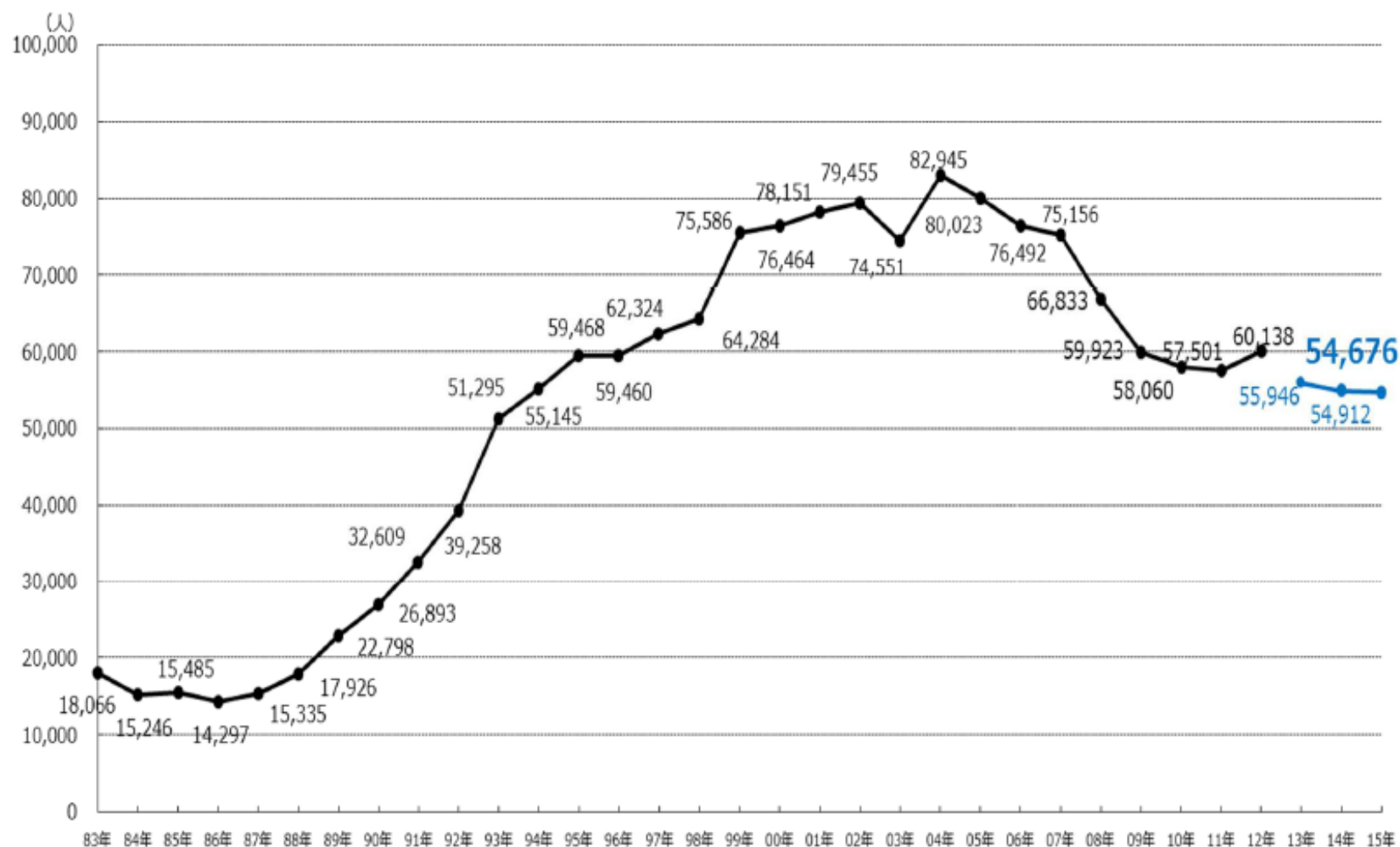


日本人の海外留学状況と 政策的支援

日本人海外留学者数の推移①

OECD 等による統計

①留学生数の推移



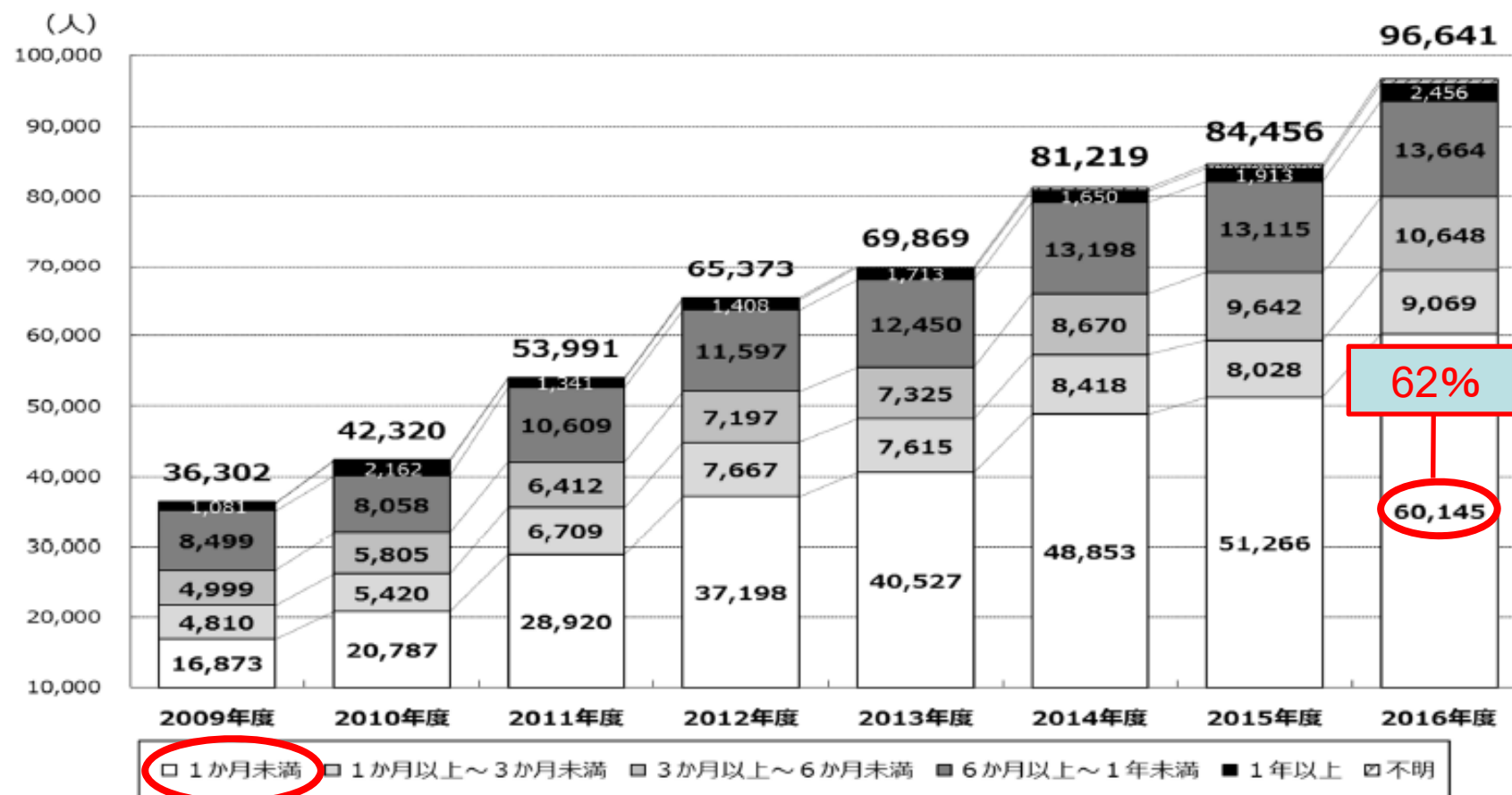
文科省(2017)がOECD, IIE、中国教育部、台湾教育部などのデータをもとに集計したもの。留学生の定義は統一されていない。

日本人海外留学者数の推移②

○独立行政法人日本学生支援機構の調査による状況

①留学期間別留学生数の推移

協定等に基づく日本人学生留学状況及び
協定等に基づかない日本人学生留学状況
(在籍大学等把握分)の合計



学位取得留学 ⇒ 単位取得留学へ

出典:文部科学省(2017)

主な留学先・留学者数

学位取得留学中心①

②主な留学先・留学者数(2015 年)

35%

(単位：人)

No.	国・地域	当該国における日本人学生の受入れ状況			
		留学者数	前年数	対前年比	
1	アメリカ合衆国	19,060	19,064	△ 4	△0.0%
2	中国	14,085	15,057	△ 972	△6.5%
3	台湾	6,319	5,816	503	8.6%
4	イギリス	3,098	3,089	9	0.3%
5	ドイツ	1,756	1,777	△ 21	△1.2%
6	オーストラリア	1,672	1,817	△ 145	△8.0%
7	フランス	1,646	1,540	106	6.9%
8	カナダ	1,479	1,644	△ 165	△10.0%
9	韓国	1,286	1,212	74	6.1%
10	ブラジル	759	606	153	25.2%
-	その他	3,516	3,290	226	6.9%
	合計	54,676	54,912	△ 236	△0.4%

主な留学先・留学者数

単位取得留学中心②

②主な留学先・留学者数（2016 年）

（単位：人）

No.	国・地域	2016 年度			2015 年度		
			対前年度比			対前年度比	
1	アメリカ合衆国	20,159	1,483	7.9%	18,676	△ 93	△0.5%
2	オーストラリア	9,472	1,392	17.2%	8,080	804	11.1%
3	カナダ	8,875	686	8.4%	8,189	816	11.1%
4	韓国	6,457	1,800	38.7%	4,657	△ 876	△15.8%
5	イギリス	5,827	△ 454	△7.2%	6,281	△ 583	△8.5%
6	中国	5,782	710	14.0%	5,072	307	6.4%
7	タイ	4,271	1,088	34.2%	3,183	429	15.6%
8	台湾	4,237	750	21.5%	3,487	513	17.2%
9	フィリピン	3,212	520	19.3%	2,692	611	29.4%
10	ドイツ	2,882	60	2.1%	2,822	54	2.0%
	その他	25,467	4150	19.5%	21,317	1,255	6.3%
	合計	96,641	12,185	14.4%	84,456	3,237	4.0%

21%

アジア諸国への留学の増加：短い、近い留学の増加

出典：文部科学省（2017）

文科省の海外留学支援政策(1)

- 日本再興戦略(2013):2020年までに日本人海外留学生数を6万人(2010年)から12万人へ倍増
- 「若者の海外留学促進実行計画」
 1. 大学への支援(競争的資金)
 - 大学の世界展開力強化事業 (Inter-University Exchange Project):2011年～
 - スーパーグローバル大学等事業
 - スーパーグローバル大学創成支援(Top Global University): 2014～2024年
 - 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援(Go Global Japan):2012～2017年

文科省の海外留学支援政策(2)

2. 学生への支援

- 海外留学支援制度: **協定派遣型**・**学位取得型**(2018年度予算)
 - **協定派遣**(21,000人): 8日以上1年以内
 - **大学院学位取得**(252人): 修士2年間、博士3年間
 - **学部学位取得**(78人): 学士4年間(2017年から)
- 官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム～(2014年～) <高校生も対象>
 - 留学期間: 28日以上2年以内
 - これまでの奨学金受給者: 約5,000人(2018年5月現在)
 - 目標: 年間1,500人程度、2020年までに寄附金総額200億円, 10,000人派遣を目標

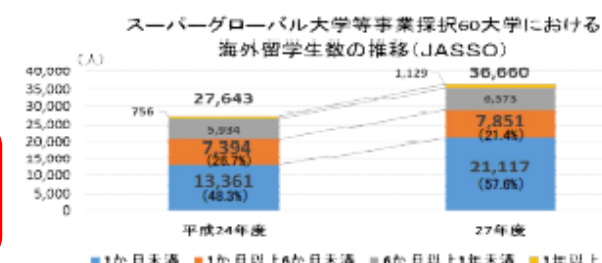
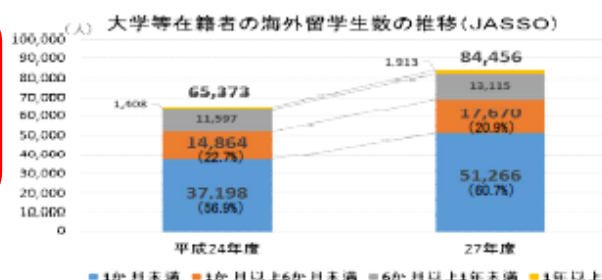
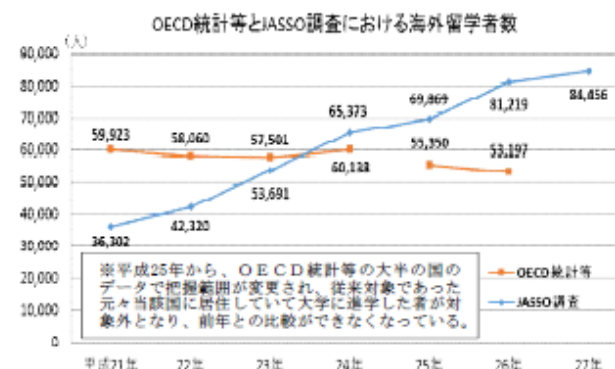
評価の結果

- 成果指標の達成状況は、6万→5.3万へと減少。一方、交換留学など、日本の大学等に在籍した状態で留学する者は増加（6.5万→8.4万）。ただし、こうした留学生の大半が現行の成果指標の対象外

- ・ 第2期教育振興基本計画では、日本人大学生等の海外留学生を6万人（平成24年）→12万人（32年目途）とする成果指標を設定。この指標には、主に海外の大学等に在籍する日本人留学生を対象とするOECD統計等を使用
- ・ 本指標の達成状況をみると平成26年は約5.3万人と減少。一方、上記のOECD統計等に大半が含まれない交換留学などの日本の大学等に在籍した状態で留学する者は、平成24年度6万5,373人から27年度8万4,456人と大きく増加（日本学生支援機構（JASSO）調査）

- 日本の大学等に在籍した状態で留学する者の約8割は6か月未満（かつ約6割は1か月未満）の短期留学で、企業ニーズ（前ページ参照）とはミスマッチ。短期留学が、グローバル人材の3要素の向上に対していかなる効果を持つのか、十分な検証が必要

- ・ 日本の大学等に在籍した状態で留学する者8万4,456人（平成27年度）のうち、留学期間1か月未満は5万1,266人（60.7%）、1か月以上6か月未満は1万7,670人（20.9%）で、6か月未満の短期留学が全体の81.6%
- ・ また、国が重点支援を行っているスーパーグローバル大学等事業採択60大学においても、1か月未満が57.6%、6か月未満は79.0%（平成27年度）。1か月未満の留学の増加が顕著（24年度48.3%→27年度57.6%）
- ・ 企業側は、語学力、異文化理解、多様な価値観の受容の各能力の涵養という面から、6か月以上の留学期間が必要との認識であり、ミスマッチが発生。短期留学、特に1か月未満のような極めて短期の留学が、グローバル人材の3要素の向上に対してどのような効果を持つのか、十分検証される必要



勧告

- 短期留学について、グローバル人材育成に係る政策上の位置付けを明確にした上で、次期計画における海外留学促進に係る成果指標を検討し、その結果を反映する必要

先行研究

留学の中長期的なインパクトにかかる先行研究（米国）

Study Abroad for Global Engagement (SAGE)

- 1960年から2005年までの約50年間に海外留学した6,378名と、留学非経験者5,924名に対してサーベイ調査を実施。
- さらに留学経験者63名に対するインタビューと複数のケーススタディを実施。
- インパクトの焦点：留学経験の長期的なインパクトとしてグローバルエンゲージメント（国際社会貢献）の5つの側面（市民社会参画、慈善事業、知識創造、社会起業、自発的で簡素な生活）、および、留学後の進学やキャリア選択への影響について。（留学が留学経験者個人だけではなく社会へ与える影響を議論。）
- 留学経験は、特に自発的で簡素な生活や、留学後の進学・キャリア選択という留学経験者の人生にわたり影響を与えることが明らかになった。
- 本研究調査票の作成においては、SAGEの調査票を参考にし、SAGE研究代表者の一人のDr. Fryにも助言を求めた。

留学期間別でのインパクトに関する先行研究①

Dwyer (2004) による調査研究

- ・ 調査対象者：1年間の留学経験者（1,191名）、1学期間の留学経験者（した2,308名）、数週間の短期留学経験者（224名）
- ・ 調査結果：1年間の留学経験者の方が、①勉学面での到達度、②文化や言語学習への意欲の高まり、③多様な人々との交流機会の探求などの項目を含む異文化への志向、④個人としての成長、⑤キャリアへの影響など、様々な側面においてよりインパクトを実感していた

留学期間別でのインパクトに関する先行研究②

Kehl・Morris（2008）による調査研究

- ・ 調査概要：1学期間の留学経験者（193名）と、短期留学経験者（144名）、留学非経験者（183名）に対して、グローバル・マインディドネス（世界との関連性や世界の人々に対する責任感）についてのアセスメント・ツールを用いて調査を実施した。
- ・ 1学期間の留学経験者の方が、短期留学経験者や留学非経験者と比べて、グローバル・マインディドネスのスコアが統計的に有意に向上していたが、短期留学経験者と留学非経験者では有意な差は見出されなかった。

留学期間別でのインパクトに関する先行研究③

日本国内

ベネッセコーポレーション（2009）による調査研究

- ・ 2年以上の留学経験者と1ヶ月以内の留学経験者の2グループを対象に、アンケート調査を実施。
- ・ 2年以上の留学経験者の方が、異文化交流の能力、国際感覚、行動力、語学力、知識・経験などの面で、留学経験を仕事に活かすことができていると回答した割合が高かった。

先行研究まとめ

- これらの国内外の先行研究の結果を総合的に解釈すると、長期での留学経験の方が、知識などの学術面だけではなく、能力や意識の高まりなどの面において、より大きなインパクトを与えたとする傾向が見出せる。
- また、短期と長期の期間別の留学を比較すると、長期の方がキャリア上のインパクトは高いということが示されている。
- しかし、これらの先行研究では、学位取得・単位取得という目的別でのインパクトの分析は行われていなかった。
- また日本国内における留学のインパクト調査は、留学非経験者というコントロールグループを用いて実証的に行われていなかった。

理論的背景：変容的学習理論

- メジロー（2000）によると、変容的学習とは、ものの見方や考え方、感じ方、行為の仕方等、個人によって習慣的に行われてきた準拠枠（frame of reference）が、批判的な振り返り（省察）を通じて変容していくことを伴う学習を指す（常葉－布施, 2004）。成人の学習理論の中で主要な理論として参照されている。
- 海外留学経験も、文化や言語の異なる社会の中で学業に励み、現地の人々と交流することで、自ら持っていた価値観、考え方、態度が再検討され変容していくという、変容的学習をもたらす機会である。

メジローの変容的学習理論による 認識の準拠枠の変容

- ・ パターン 1既存の準拠枠の精密化
- ・ パターン 2新たな観点の学習
- ・ パターン 3**批判的省察と観点の変化**
- ・ パターン 4**心的傾向の変容**

変容的学習は、認識の準拠枠の変容、すなわちパターン 3 と パターン 4 のように、**観点の変化と心的傾向の変容**が起こったとき起こるものであるとしている（藤村, 2006）。

留学経験でも、新しい文化・言語の環境の中で新たな観点の学習が起こり、そこで批判的省察を通じて、**観点が変化し、心的傾向が変容する**という変容的学習が行われると解釈できる。

研究の概要

- ・ **本研究プロジェクトの目的**：日本人の留学経験者を対象に、留学経験が能力、意識、行動、価値観、キャリア、人生の満足度を与えた中長期的なインパクトについて、留学非経験者との比較分析により明らかにする
- ・ **本報告における焦点**：学部レベルの長期留学（学位取得目的）と短期留学（単位取得目的等）の自己評価に基づくインパクトを、留学非経験者（日本国内での学位取得者）と比較（能力の向上・意識の変化・キャリア・授業への参加）

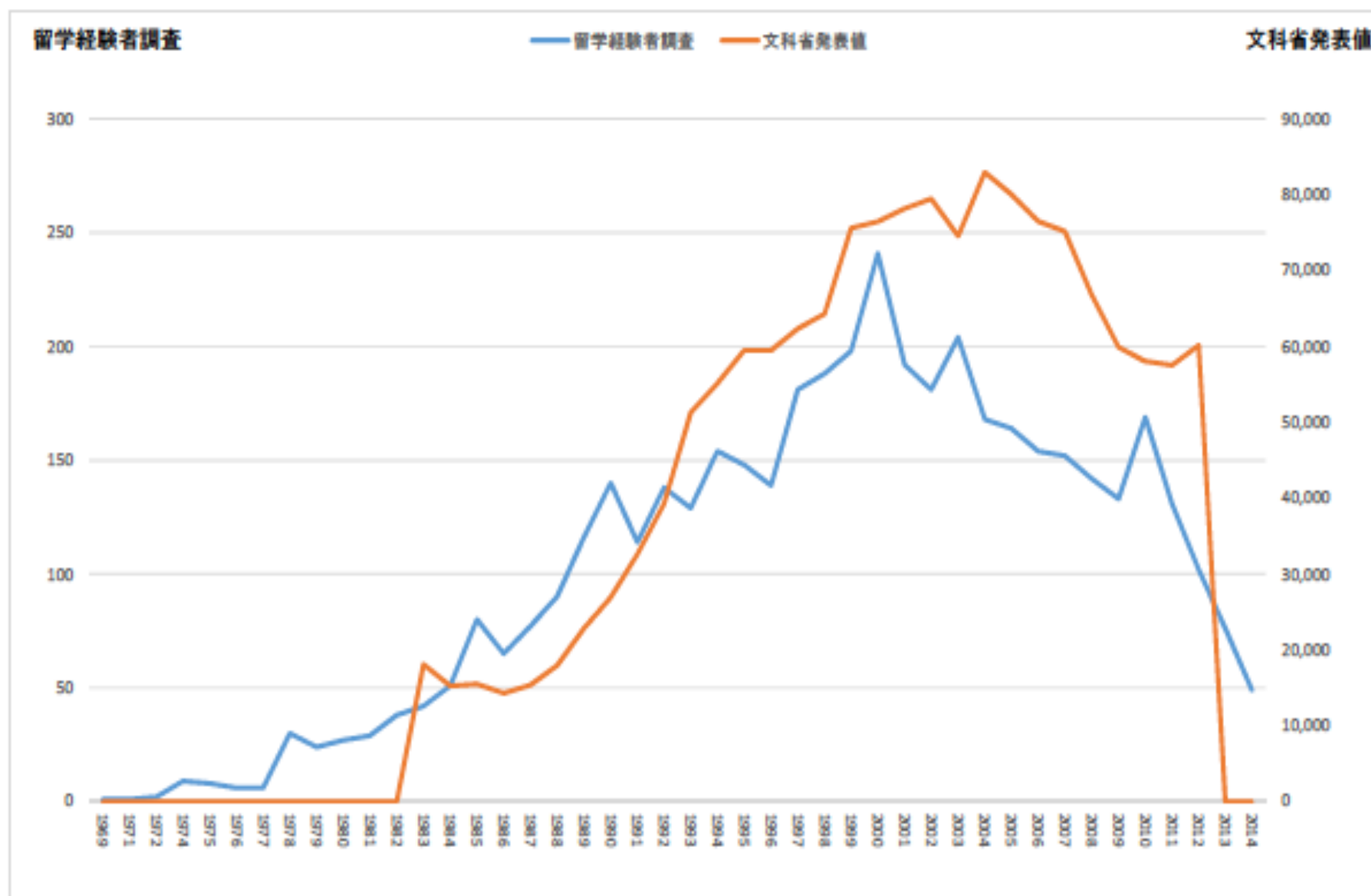
本報告での分析対象

- 海外の学部課程に
 - **学位取得を目的とした3年間以上留学した者：416名**
 - **単位取得またはその他の目的で3ヶ月以上1年間未満留学した者：757名**
- 対照群（留学非経験者）：
日本国内で大学を卒業した者：710名

【留学開始年別 留学生送り出しの人数の比較】 留学経験者調査(4,489人)と文科省発表値

それぞれ留学した時の留学開始年で比較している。留学経験者調査で直近の数値が文科省発表値よりも小さいのは、留学後のインパクトをテーマとした調査であることが影響していると考えられる(直近に留学した人はその後の日本での経験値が少なく、本調査の設問には答えにくい)。

本調査対象者 (4,489) と文科省発表値



本調査の参加者には、留学直後の参加者は少なめとなっているが、留学の中長期的なインパクトの調査としていたことが影響していると考えられる。

調査対象者（詳細）

- **留学経験者詳細**

- 複数回留学経験のある者については、回答者が「最も重要な留学」と選択した留学先学校（段階）種別で集計
- 職場からの財政支援を主な留学費用負担方法とした人を除く

- **留学非経験者詳細**

- 3ヶ月以上の海外留学や海外在住経験がなく、外資系を含む日本に存在する企業勤務者、もしくは主婦または無職
- 国内の大学入学前に外国語運用能力を身につけていなかった、家庭内で外国語を利用していなかった、国内のインターナショナル・スクールに通ったことがない、帰国子女ではない者

データ収集

- 留学経験者：当該研究関係者のネットワーク、国際教育等の分野に関連したメーリング・リストおよびソーシャル・メディアを通じた周知および民間調査会社のモニターに対して、オンラインによる質問票調査を2014年12月から2015年5月上旬まで実施。
- 留学非経験者：経験者の回答者における年代別構成比率に相似するよう割付を調整し、調査会社のモニターに対して、オンラインによる質問し調査を2015年8月から9月にかけて実施。

調査対象者（性別・年代別）

	性別		年代			
	男	女	50歳代以上	40歳代	30歳代	20歳代以下
学位取得 目的の留学 (416)	218 (52.4%)	198 (47.6%)	56 (13.5%)	175 (42.1%)	145 (34.9%)	40 (9.6%)
単位取得・その他の目的の 留学 (757)	381 (50.3%)	376 (49.7%)	89 (11.8%)	208 (27.5%)	264 (34.9%)	196 (25.9%)
国内学部卒業 (710)	334 (47.0%)	376 (53.0%)	144 (20.3%)	244 (34.4%)	227 (32.0%)	95 (13.4%)

調査対象者（国別）

	学位取得目的の留学（416）	単位取得・その他の目的の留学（757）
アメリカ合衆国	325 (78.1%)	380 (50.2%)
イギリス	25 (6.0%)	75 (9.9%)
中国	12 (2.9%)	66 (8.7%)
カナダ	17 (4.1%)	40 (5.3%)
オーストラリア	9 (2.2%)	43 (5.7%)
ドイツ	8 (1.9%)	28 (3.7%)
韓国	2 (0.5%)	15 (2.0%)
フランス	2 (0.5%)	13 (1.7%)
ニュージーランド	6 (1.4%)	9 (1.2%)
台湾	2 (0.5%)	9 (1.2%)
その他	8 (1.9%)	79 (10.4%) (オーストラリア9, スペイン7, タイ7など)

質問票の構成

- フェイスシート
 - 留学中の経験（中間ファクター）
 - 留学後のインパクト
-
- 留学（留学非経験者の場合は国内の大学・大学院での学修と学生生活）のインパクトに関するほぼ全ての項目について、リッカート法の4段階尺度により評価を依頼。

調査項目：留学中の授業に関する経験 (留学非経験者は国内の学部・大学院における経験) に関する5項目

授業で積極的に発言した	つよくそう思う (4点) そう思う (3点) あまりそう思わない (2点) 全くそう思わない (1点)
先生と積極的に交流した	
クラスメートと積極的に交流した	
宿題に積極的に取り組んだ	
授業内のプレゼンテーション (発表や準備) に積極的に取り組んだ	

調査項目：能力の向上に関する18項目

専門知識・技能	目的を達成する力
基礎学力・一般教養	柔軟性
外国語運用能力	協調性
コミュニケーション能力	社交性
留学先（外国）の社会・週間・文化に関する知識	創造力・クリエイティビティ
リーダーシップ	忍耐力
積極性・行動力	問題解決能力
異文化に対応する力	批判的思考力
ストレス耐性	論理的思考力
つよくそう思う（4点） そう思う（3点） あまりそう思わない（2点） 全くそう思わない（1点）	

調査項目：意識の高まりに関する16項目

日本人としての意識が高まった	社会での男女共同参画の意識が高まった
アジア人としての意識が高まった	性別に捉われず家庭内における役割を担うことへの意識が高まった
地球市民としての意識が高まった	宗教に関する寛容性が高まった
政治・社会問題への関心が高まった	リスクをとること、チャレンジすることに関する意識が高まった
外交・国際関係への興味が高まった	価値判断を留保して、なぜそうなのかを考えようとするようになった
環境・貧困問題等の地球的課題に対する意識が高まった	自己肯定感（自信）が高まった
平和に対する意識が高まった	自己効力感（自分はやるべきことを実行できるという意識）が高まった
多様な価値観や文化的背景を持つ人々と共生する意識が高まった	自己有用感（社会の中で自分は必要とされているという意識）が高まった
つよくそう思う（4点） そう思う（3点） あまりそう思わない（2点） 全くそう思わない（1点）	

キャリア・採用に関する項目

	項目
キャリアに関する属性	現在の職位 年収（0～200万円から2,000万円以上までの間の8段階から選択）
キャリアへの影響 （6項目）	キャリア設計の上で助けになった 現在の仕事に就く上で助けになった 現在の年収を高めるのに役立った 現在の仕事において留学で学んだ知識やスキルを使っている 起業しようという意欲が高まった（営利・非営利を含む） NPOや社会活動をしようという意欲が高まった
採用の際の評価 （4項目）	自分の留学経歴が評価された 留学で身につけた語学力が評価された 留学で学んだ知識やスキルが評価された 外国人とのコミュニケーション経験が評価された
つよくそう思う（4点） そう思う（3点） あまりそう思わない（2点） 全くそう思わない（1点）	

調査項目：満足度に関する6項目

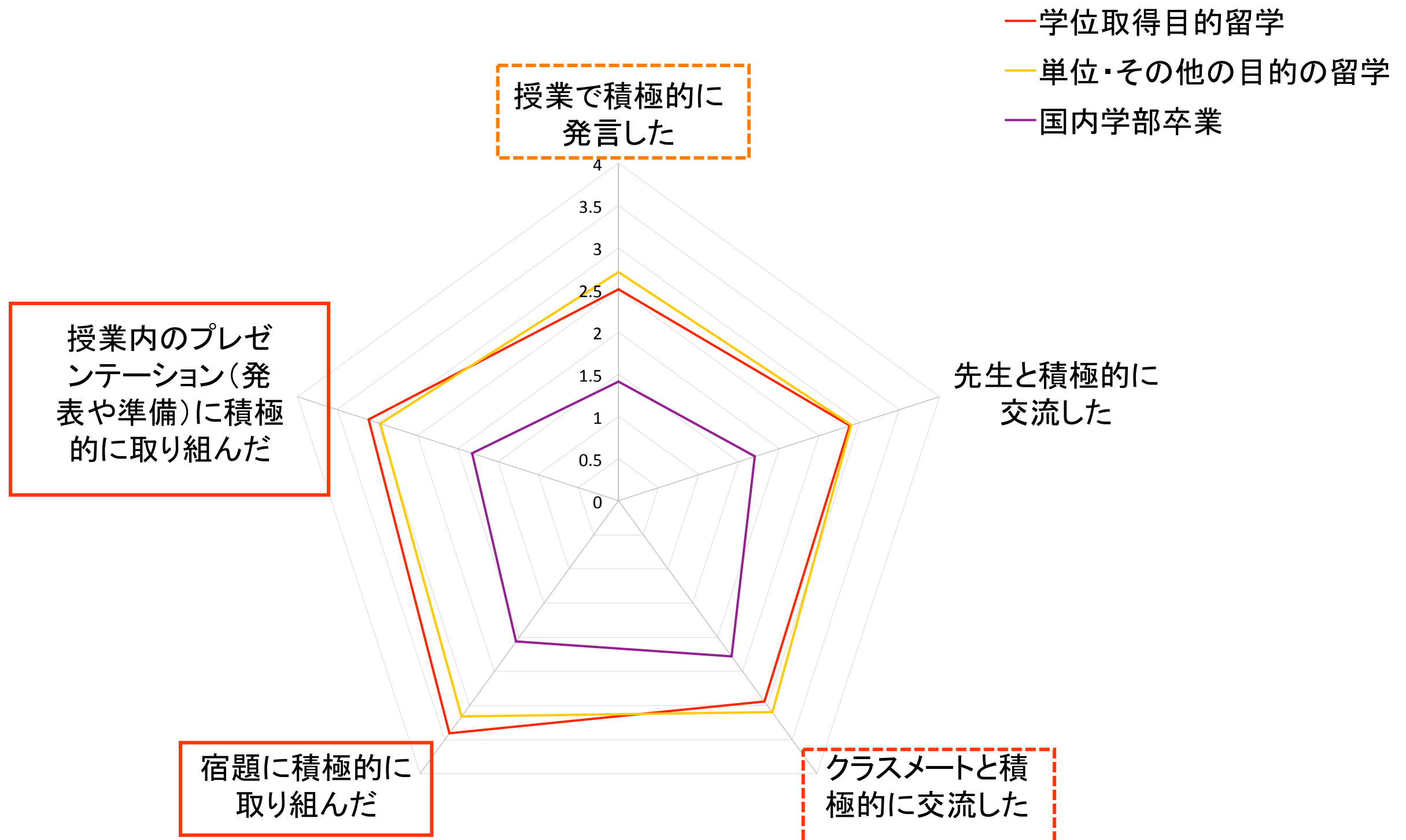
現在の仕事に満足している	仕事以外のプライベートな生活に満足している
現在の収入に満足している	交友関係に満足している
自分の留学経験に満足している	人生に満足している
つよくそう思う（4点） そう思う（3点） あまりそう思わない（2点） 全くそう思わない（1点）	

結果報告

授業への参加

	学位取得目的留学 (n = 416)		単位・その他の目的の留学 (n = 757)		国内学部卒業 (n = 710)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
授業で積極的に発言した	2.51	0.83	2.71	0.79	1.41	0.87
先生と積極的に交流した	2.88	0.81	2.90	0.76	1.70	0.98
クラスメートと積極的に交流した	2.94	0.81	3.10	0.71	2.28	0.94
宿題に積極的に取り組んだ	3.41	0.71	3.16	0.75	2.06	0.98
授業内のプレゼンテーション (発表や準備)に積極的に取り組んだ	3.11	0.77	2.97	0.76	1.82	0.97

授業への参加



留学経験者の方が概ね高い自己評価。

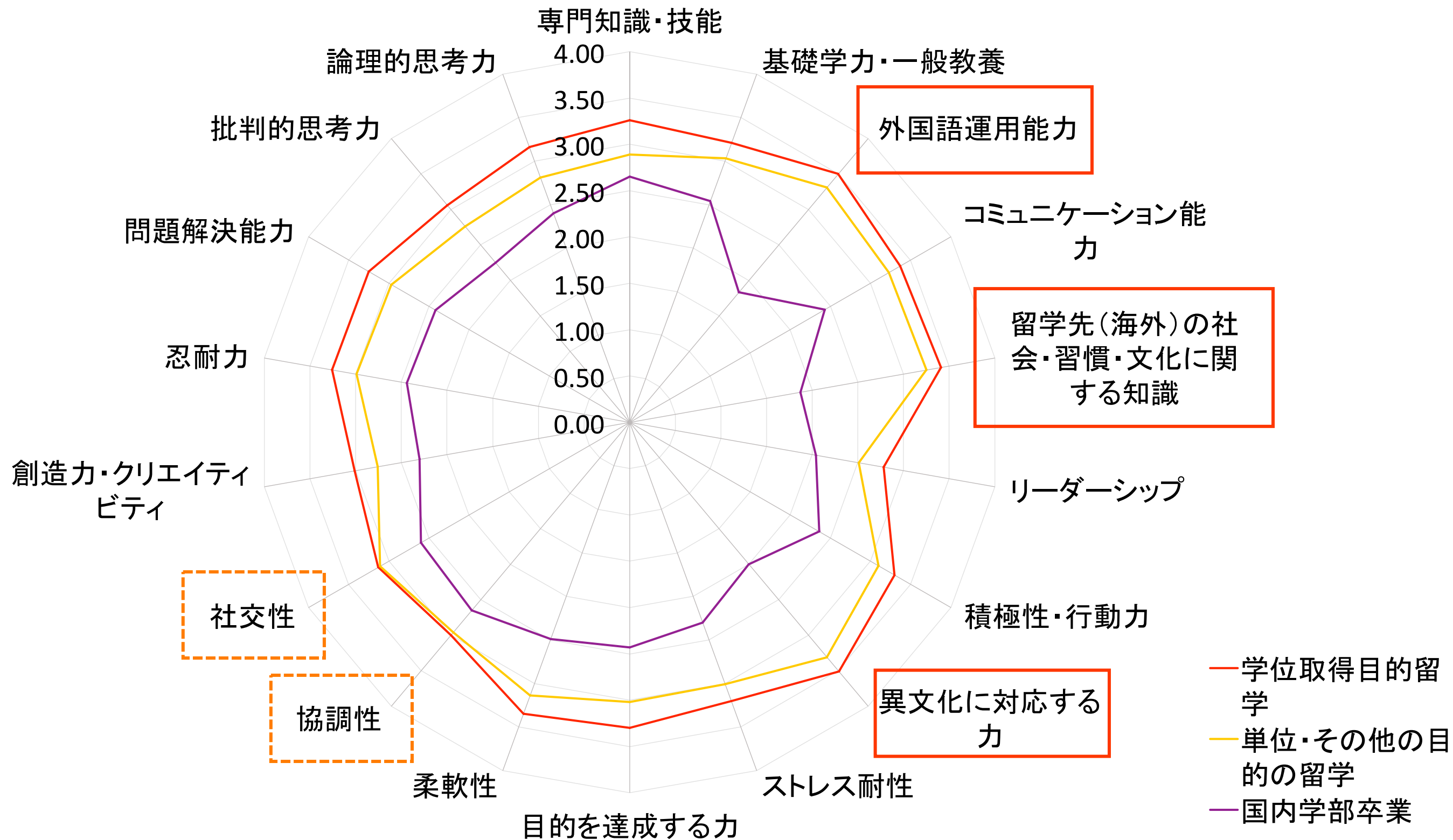
長期留学（学位取得目的）の方が、課題・成績に関連した活動に積極的。

短期留学（単位取得目的等）の方が、授業での発言、クラスメートとの交流に積極的。

能力の向上について

	学位取得目的留学 (n = 416)		単位・その他の目的の留学 (n = 757)		国内学部卒業 (n = 710)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
専門知識・技能	3.26	0.675	2.89	0.702	2.65	0.761
基礎学力・一般教養	3.21	0.670	3.03	0.675	2.54	0.741
外国語運用能力	3.50	0.593	3.31	0.652	1.83	0.988
コミュニケーション能力	3.37	0.638	3.23	0.695	2.43	0.826
留学先（海外）の社会・習慣・文化に関する知識	3.41	0.595	3.25	0.643	1.87	0.955
リーダーシップ	2.78	0.843	2.51	0.786	2.04	0.833
積極性・行動力	3.30	0.690	3.10	0.732	2.36	0.836
異文化に対応する力	3.51	0.585	3.31	0.661	2.00	0.951
ストレス耐性	3.20	0.757	3.01	0.735	2.30	0.843
目的を達成する力	3.30	0.676	3.02	0.711	2.43	0.809
柔軟性	3.35	0.666	3.14	0.678	2.49	0.790
協調性	3.00	0.795	2.96	0.705	2.65	0.764
社交性	3.13	0.751	3.11	0.685	2.60	0.775
創造力・クリエイティビティ	3.01	0.746	2.76	0.768	2.30	0.806
忍耐力	3.26	0.703	2.99	0.711	2.44	0.803
問題解決能力	3.25	0.658	2.97	0.689	2.42	0.788
批判的思考力	3.06	0.785	2.76	0.797	2.25	0.833
論理的思考力	3.16	0.744	2.81	0.743	2.40	0.807

能力の向上について



留学経験者の方が概ね高い自己評価。

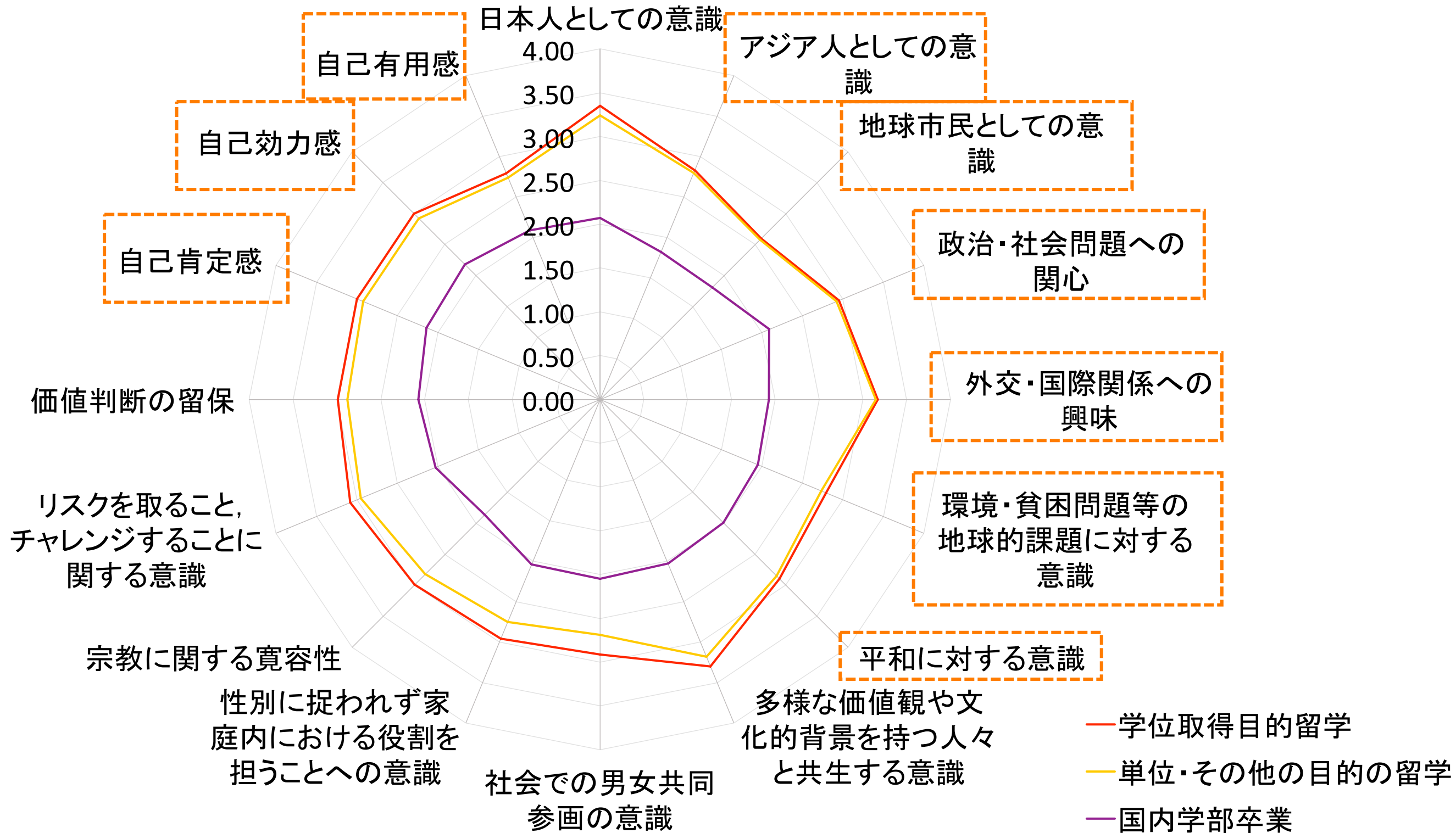
長期留学（学位取得目的）の方が、概ね様々な能力の向上を高く自己評価。

短期留学（単位取得目的等）は、協調性・社交性については長期留学と差が見られなかった。

意識の高まりについて

	学位取得目的留学 (n = 416)		単位・その他の目的の留学 (n = 757)		国内学部卒業 (n = 710)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
日本人としての意識	3.35	0.771	3.24	0.755	2.07	0.956
アジア人としての意識	2.83	0.938	2.80	0.855	1.82	0.939
地球市民としての意識	2.60	0.939	2.58	0.866	1.81	0.898
政治・社会問題への関心	2.95	0.852	2.92	0.775	2.09	0.897
外交・国際関係への興味	3.17	0.727	3.15	0.727	1.93	0.939
環境・貧困問題等の地球的課題に対する意識	2.79	0.889	2.73	0.809	1.95	0.889
平和に対する意識	2.90	0.856	2.85	0.811	1.99	0.902
多様な価値観や文化的背景を持つ人々と共生する意識	3.30	0.736	3.18	0.757	2.03	0.953
社会での男女共同参画の意識	2.91	0.861	2.69	0.838	2.05	0.893
性別に捉われず家庭内における役割を担うことへの意識	2.96	0.867	2.75	0.866	2.04	0.923
宗教に関する寛容性	2.99	0.872	2.82	0.845	1.86	0.954
リスクを取ることにチャレンジすることに関する意識	3.08	0.801	2.95	0.803	2.03	0.910
価値判断の留保	2.99	0.808	2.88	0.780	2.07	0.883
自己肯定感（自信）	3.00	0.779	2.92	0.786	2.14	0.871
自己効力感（自分はやるべきことを実行できるという意識）	3.00	0.748	2.92	0.758	2.18	0.875
自己有用感（社会の中で自分は必要とされているという意識）	2.79	0.837	2.74	0.800	2.09	0.847

意識の高まりについて



留学経験者の方が概ね高い自己評価。

長期留学（学位取得目的）の方が、様々な意識（価値観と深く関連する項目を含む）の高まりを高く自己評価。
世界や社会問題への関心・自己に関する項目については、短期留学（単位取得目的等）も差が見られない。

現在の職位クラス・年収

		学位取得目的 留学 (n = 416)	単位・その他の 目的の留学 (n = 757)	国内学部卒業 (n = 710)
現在の 職位	経営者・役員クラス	14.2%	7.6%	0.3%
	管理職クラス	18.3%	20.1%	17.2%
	一般社員クラス	43.4%	54.3%	67.8%
	アルバイト・契約社員 など	15.0%	12.4%	14.5%
	その他	9.1%	5.6%	0.2%
現在の年収（平均値）		547.0万円	479.3万円	449.1万円
留学資金の 支弁方法	給付奨学金	4.1%	37.5%	-
	私費	95.9%	62.5%	-

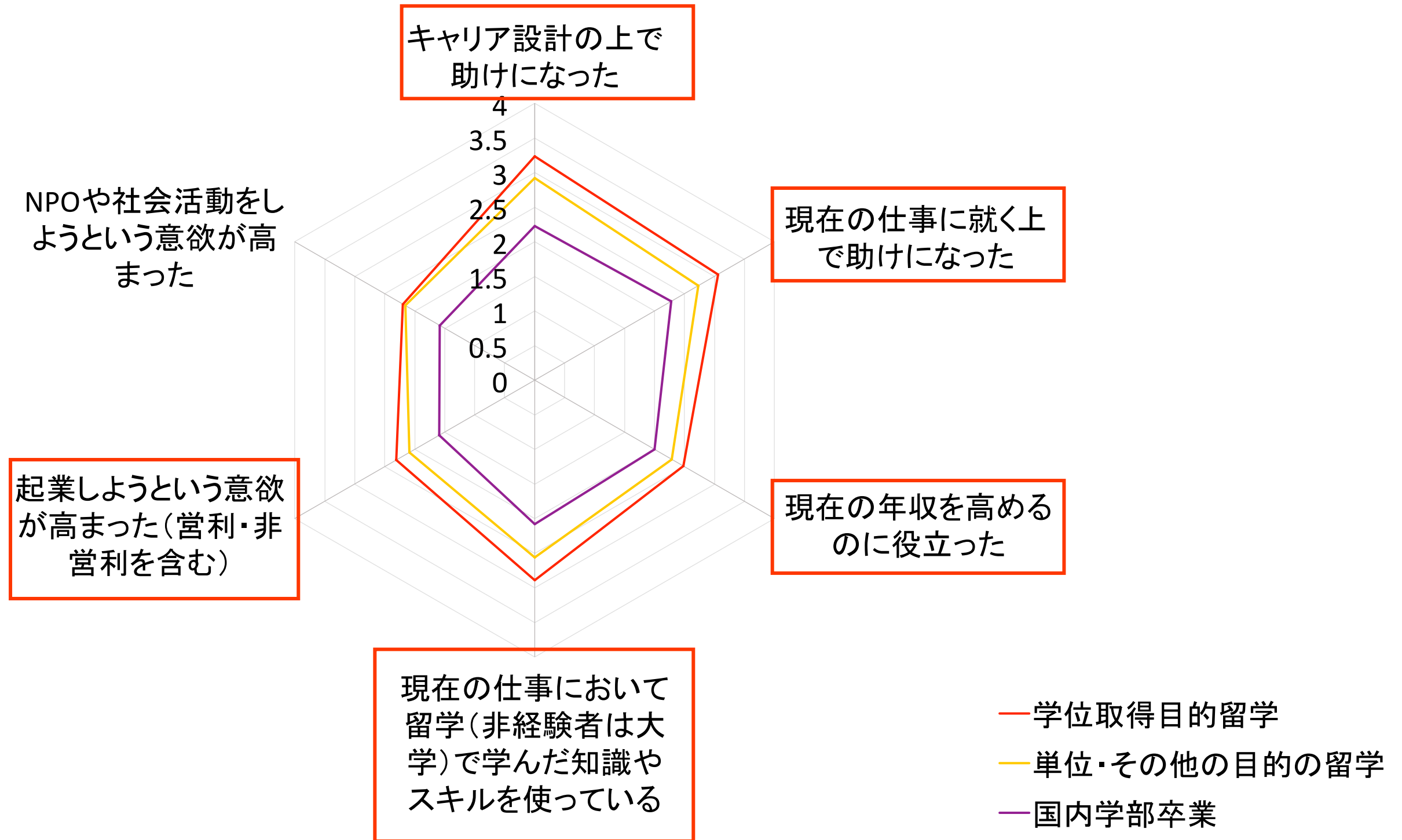
注1) 現在の職位については、主婦・無職を除外し、学士留学(n=394)、単位・その他の留学(n=693)、国内大学卒業(n=574)にて集計。

注2) 現在の年収について「答えたくない」という選択肢を対照群（留学非経験者）のみ設定した。

キャリアへの影響について

	学位取得目的留学 (n = 416)		単位・その他の目的 の留学 (n = 757)		国内学部卒業 (n = 710)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
キャリア設計の上で助けになった	3.24	0.852	2.92	0.875	2.23	0.819
現在の仕事に就く上で助けになった	3.06	0.989	2.73	1.008	2.28	0.902
現在の年収を高めるのに役立った	2.48	1.013	2.29	0.969	2.00	0.801
現在の仕事において留学（非経験者は大学）で学んだ知識やスキルを使っている	2.89	0.976	2.56	1.001	2.08	0.851
起業しようという意欲が高まった（営利・非営利を含む）	2.31	1.023	2.09	0.995	1.59	0.698
NPOや社会活動をしようという意欲が高まった	2.20	0.967	2.16	0.939	1.58	0.675

キャリアへの影響について

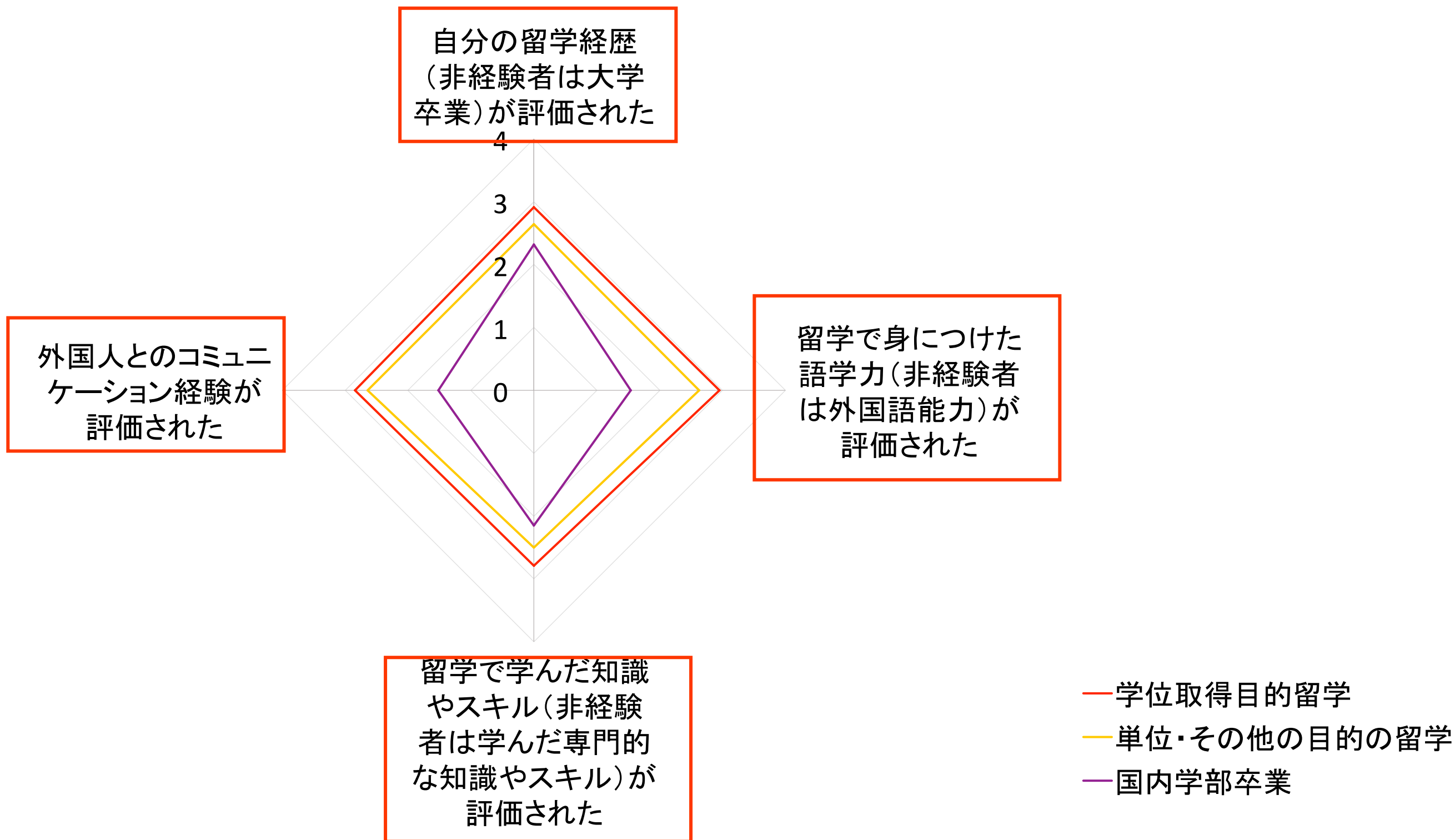


留学経験者の方が概ね高い自己評価だが、能力・意識と比較すると差は小さい。
長期留学（学位取得目的）の方が、キャリアへの影響を高く自己評価。

採用時の評価

	学位取得目的留学 (n = 416)		単位・その他の目的 の留学 (n = 757)		国内学部卒業 (n = 710)	
	平均 値	標準 偏差	平均 値	標準 偏差	平均 値	標準 偏差
自分の留学経歴（非経験者は大学卒業）が評価された	2.91	0.959	2.64	0.949	2.32	0.834
留学で身につけた語学力（非経験者は外国語能力）が評価された	2.95	0.968	2.63	0.96	1.54	0.611
留学で学んだ知識やスキル（非経験者は学んだ専門的な知識やスキル）が評価された	2.79	0.973	2.5	0.942	2.15	0.803
外国人とのコミュニケーション経験が評価された	2.84	0.977	2.64	0.962	1.52	0.607

採用時の評価

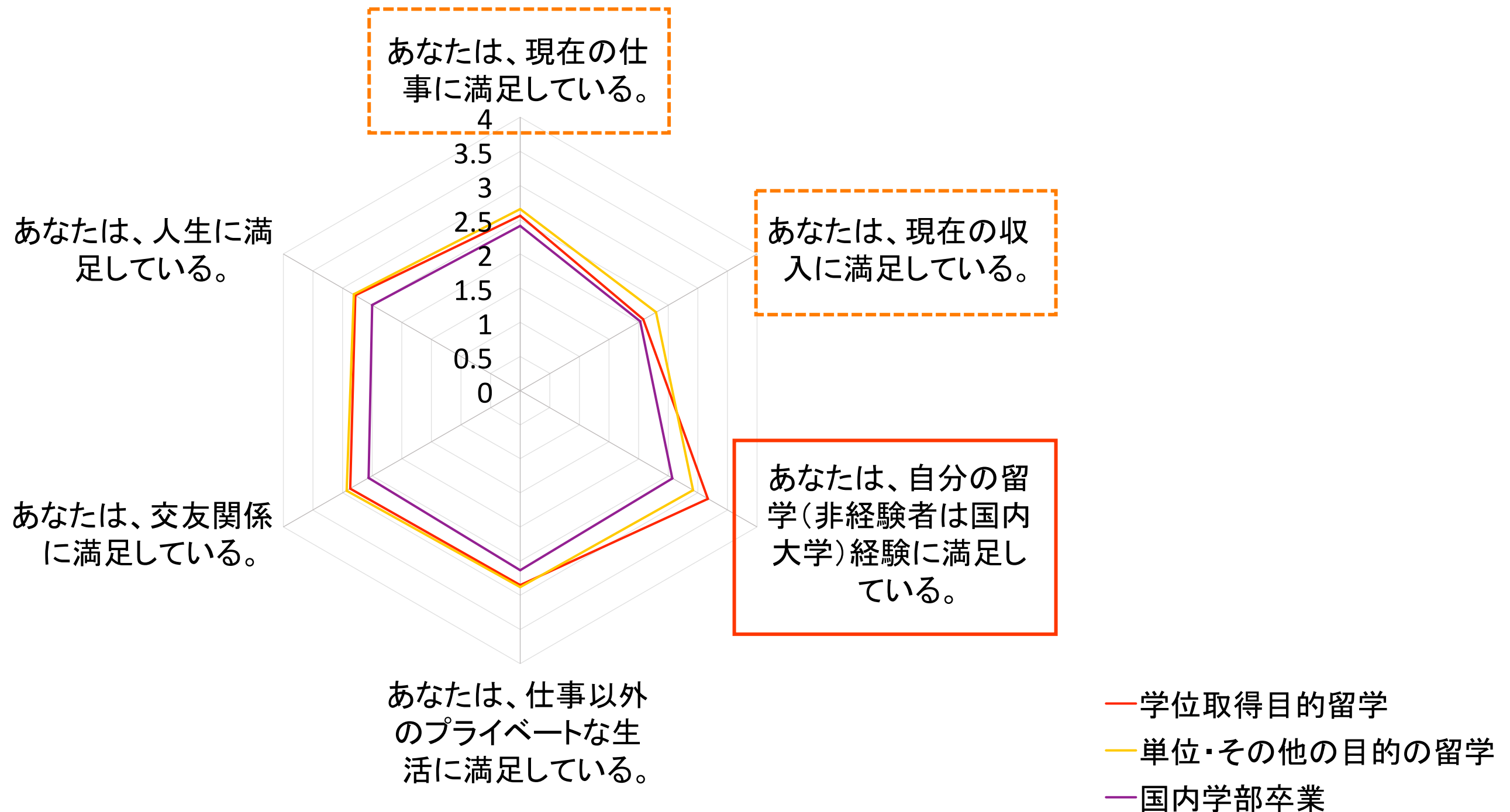


留学経験者の方が概ね高い自己評価。
(外国人とのコミュニケーション・語学力について差が大きい)
長期留学(学位取得目的)の方が、採用時の評価を高く自己評価。

満足度

	学位取得目的留学 (n = 416)		単位・その他の目的の留学 (n = 757)		国内学部卒業 (n = 710)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
あなたは、現在の仕事に満足している。	2.56	0.945	2.65	0.884	2.41	0.811
あなたは、現在の収入に満足している。	2.08	0.887	2.29	0.895	2.03	0.780
あなたは、自分の留学 (非経験者は国内大学) 経験に満足している。	3.17	0.817	2.92	0.801	2.57	0.804
あなたは、仕事以外のプライベートな生活に満足している。	2.85	0.806	2.88	0.768	2.63	0.765
あなたは、交友関係に満足している。	2.87	0.794	2.93	0.751	2.56	0.714
あなたは、人生に満足している。	2.78	0.809	2.81	0.780	2.50	0.760

満足度



留学経験者の方が概ね高い自己評価だが、、能力・意識と比較すると差は小さい。

収入の満足度については、長期留学と留学非経験者で差がほとんど見られない。

長期留学（学位取得目的）の方が、自分の留学経験を高く自己評価。

短期留学（単位取得目的等）の方が、現在の仕事、収入への満足度を高く自己評価。

まとめと考察

①留学経験者と留学非経験者の比較

本報告で対象とした全てのカテゴリ（授業に関連した活動、能力の向上や意識の高まり、キャリア、採用時の評価、満足度）に関するインパクトのそれぞれにおいて、概ね留学経験者の2つのグループの方が、留学非経験者よりも自己評価が高かった。

→ 留学中、授業に関する経験等への積極的な参加等を通じて、自らの既存の枠組みを吟味し、能力や意識の面において、より多くの変容的学習の機会が得られたのではないか

授業に関して→ 本調査回答者の過半数が留学した欧米では、インタラクティブで、参加型の教授法が主として用いている傾向にあることも背景にあるか（Smithee, Greenblatt, & Eland, 2004）

能力・意識と比べ、キャリアへの影響・採用時の評価に関する項目は差が小さい傾向

→ 能力・意識面は留学経験の目的とより直接的に関係しているか

→ 留学経験が採用時に必ずしも高く評価されていないと感じている可能性

②長期留学(学位取得目的)と 短期留学(単位取得目的等)の比較

長期留学(学位取得目的)

- 課題中心・成績重視の授業関連活動
↓
- 能力全般の向上
- 世界や社会問題への関心・自己評価に加え、文化に根ざした価値観に関連する意識の高まり
- キャリア上の影響
- 採用時の評価
- 留学経験への満足

短期留学(単位取得目的等)

- クラスメートとの交流・インタラクティブ中心の授業関連活動
↓
- 協調性・社交性の向上
- 世界や社会問題への関心・自己に関する意識の高まり
- 現在の仕事や収入への満足

長期留学（学位取得目的）の方が、既存の準拠枠への変化をもたらすという意味で、変容的学習を促進しているとみられるが、留学非経験者との比較ほどの大きな違いは見られなかった

→ 短期留学（単位取得目的留学）の異なった意義・役割の示唆

②長期留学(学位取得目的)と 短期留学(単位取得目的等)の比較 (2)

差が比較的大きかった項目：

キャリアへの影響・採用時の評価

→ 長期留学（学位取得目的）の留学の方が採用時に評価される傾向にある（総務省(2017)による企業ニーズに関する調査とも一致）

→ 短期留学（単位取得目的等）でも、自己評価においては、キャリア上において肯定的な影響をもたらしていることが示されている。仕事や収入への満足度は高い。

→ 長期留学よりも金銭的負担が少なく留学できることも影響か。

限界や課題

- サンプルについての課題
 - 留学に肯定的なものが回答した傾向を考慮する必要。
 - 留学経験者について、留学先の大学のレベルも考慮に入れる必要性。
- 長期留学・短期留学ごとに、授業経験だけではなく、授業以外の経験を含めた現地での経験や行動の特徴を明らかにする
- 今後は客観的な指標や、インタビュー等を用いて、長期留学(学位取得目的)と短期留学(単位取得目的等)の学習成果をより明らかにする必要がある

参考文献

- Dwyer, M. M. (2004) More is better: The impact of study abroad program duration. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 10, pp.151–163.
- Kehl, K., & Morris, J. (2008). Differences in global-mindedness between short-term and semester-long study abroad participants at selected private universities. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 15, pp.67–79.
- Mezirow, J. (2000). Learning as transformation: Critical perspectives on a theory in progress (1st ed.). San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Mezirow, J. (1991). Transformative dimensions of adult learning (1st ed.). San Francisco: Jossey-Bass.
- Paige, R. M., Fry, G. W., Stallman, E. M., Josić, J., & Jon, J.-E. (2009). Study abroad for global engagement: the long-term impact of mobility experiences. *Intercultural Education*, 20(sup1), S29–S44.
- Smithee, M., Greenblatt, S. L., & Eland, A. (2004). *U.S. classroom culture* (U.S. culture series). Washington, DC: NAFSA Association of International Educators.
- 総務省（2017）グローバル人材育成の推進に関する政策評価 ＜結果に基づく勧告＞
- ベネッセコーポレーション（2009）「留学生・海外体験者の国外における能力開発を中心とした労働・経済政策に関する調査研究」ベネッセ教育研究開発センター
- 文部科学省（2017）「日本人の海外留学状況」

本報告の関連文献

海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト

大規模調査による留学の効果測定

2018/03/30

ISBN 9784762028021

本体3,500円＋税

<執筆者>

横田 雅弘, 太田 浩, 新見 有紀子, 花田 真吾, 渡部
由紀, 秋庭 裕子, 小林 明, 米澤 彰純, 新田 功, 河
村 基, 黒田 一雄, 貝沼 知徳, 芦沢 真五

